

教師の役割再考

高橋貞雄 Takahashi Sadao
(玉川大学)

社会の変容と共に学校環境も変容する。英語教育の質と量はいつの時代も同じままではない。特に最近若い教師が増えてきて、英語教育観が従来の教育観とは大きく変わってきているようだとされる。当然、学校教育の主役である子どもたちの実態はどうかということも考慮すべき重要な観点である。最近、教師力や授業力といった〇〇力ということばがよく使われている。これをポジティブにとらえればよいのだろうか、それともネガティブなことなのだろうか。よく言えば、力のある先生のクラスや授業の上手な先生のクラスでは子どもたちがよく学ぶし、力もつけるということだろう。逆に、教える力が弱かったり、授業が上手でなかったりする先生のもとでは子どもたちが学ばないということであろう。いずれにせよ、最も重要なのは、生徒が確実な「学び」をするという、生徒の側に立った視点である。先生が立派(そう)な役割を演じていても、生徒の学びがなければ何の意味もない。すなわち、教師がどんなに見栄えのよい役者(actor)であったとしても、生徒が単なる聴衆(audience)や観客(spectator)であったのでは、よい授業にはならないだろう。

ここでは、生徒のよりよい学びを実現するために、教師にはどのような役割があるのか、また、どのような役割を果たしていけばよいのかについて少し考えてみたい。

1 Managing と Teaching

まず、教師には2つの役割があると思われる。それは管理者(manager)としての役割と、教授者(teacher)としての役割である。前者は、一般に教室運営や教室経営(classroom management)を行う役割である。つまり、出席や学習や成績を管理

し、よりよい学習環境を整える役割である。後者は、言うまでもなく、事実や知識や規範などを教授する役割である。これらはどちらが重要ということではなく、双方が依存しあう関係にあると思われる。管理がよく機能していないと、授業も成立しない、といったことはよく見られることである。逆に、よい授業が行われていれば、教室の管理は自然にうまくいくものである。最近よく耳にする「学級崩壊」という現象は何が原因で起こるのか、特定するのは難しい。教師だけでなく、様々な要因が関与しているからである。しかし、教師の管理力や授業力が原因で起こる崩壊もあるだろう。教師には、管理と授業の双方が大事であり、それによって生徒の学びが良好に行われる環境が作られるのである。

2 教授法と教師の役割

今までに、様々な教授法や指導法が開発され実践されてきた。ここでは、そうした教授法をとおして授業の中で教師が果たす役割にはどのようなものがあるのかを考えてみたい。教師が果たす役割を上手にまとめているテキストに、Diane Larsen-Freeman. *Techniques and Principles in Language Teaching*. (OUP, 2000)がある。このテキストで紹介されている教授法では、教師がそこで果たす役割が示されている。右ページの表は、その中から情報を抽出してまとめたものである。

この表を見ると、教師がいかにもいろいろな役割を果たすことを期待されているかが分かる。この他に私が今までに見たものには、KnowerやSupporterなどがある。Knowerというのは「知識を持っている人」のことであるから、Authorityの部類であろう。また、SupporterはAdviserの役割に近い。

Teaching methods	The role of the teacher
The Grammar-Translation Method	Authority
The Direct Method	Director / Partner
The Audio-Lingual Method	Orchestra leader
The Silent Way	Technician / Engineer
Desuggestopedia (暗示式教授法)	Authority
Community Language Learning	Counselor
Total Physical Response	Director
Communicative Language Teaching	Facilitator / Adviser / Co-communicator

こうした役割は、教師が主導して授業を運営する役割と、どちらかという教師は脇役に回り授業の支援を行う役割とに分かれそうである。

ここで、読者の方に以下のような質問をしてみたい。

- ①あなたは授業でどのような役割を果たしていますか？
- ②理想の授業では、教師はどのような役割を果たすべきでしょうか？

おそらく、上記の問いに対して様々な回答があるであろう。中には回答できない、という回答もあるだろう。この問いに対する答えは1つではない。教師が果たすべき役割は、その場その場に応じて変わるものだからである。学校で通常の英語教育が行われている場合には、上で取り上げた教授法を最初から最後まで一貫して行うといったことはめったにない。通常は、50分なりの授業の中で様々な活動を行い、その活動に合わせて相応しい役割を演じるはずである。もし、どの場面でも教師の役割を変えないとしたら、「何とか教授法」の頑固な信奉者か、授業そのものが単調であるかのどちらかであるだろう。いずれにせよ、授業を行うときに自分がどのような役割で生徒に向かっているか、その授業の目的にあった役割を果たしているかについて、一度考えてみていただきたいと思う。

3 教師中心と生徒中心の考え方でよいのか

上の一覧の例でも分かるように、これまでに様々な教授法が提案され実践されてきた。歴史的に言えば、教師中心の教授法から生徒中心の教授法へと振り子が振れてきている。授業は子どもたちのためにあり、学ぶのは子どもたちであるから、この流れは当然のことである。しかし、すでに述べたように、すべての活動を教師中心で行うとか、すべての活動を生徒中心で行う、といったことは好ましい授業のスタイルではない。授業は教師と生徒が協力して作

り上げるものであるから、教師・生徒中心 (teacher-student centered) の授業を構築すべきである、という見解も示されている。

最近アウトカム (成果) が重視され、生徒がどのように学んだかではなく、授業の成果として生徒が何ができるようになったかが、今まで以上に問われることになった。つまり授業のよしあしは、生徒の成果でもって判断するということである。だとすると、教師は最初に授業の到達目標を決め、生徒がその到達目標を達成するために、最適な役割を果たさなければならない。そのためには、教師は時には Authority の役割を果たさなければならないし、時には Adviser の役割も果たさなければならない。

4 授業力・教師力のある教師とは？

授業力・教師力については冒頭でも少し言及した。教員研修でもこのことを視野に入れて、様々な研修が行われている。なぜこういった研修を行うかといえば、教師が力をつけることによって、生徒の学習力や“生徒力”により結果がもたらされるということが前提にあるからである。今後、授業力や教師力を測定するために、教師を観点別に評価する試み (自己評価も含めて) が増えていくだろう。例えば、授業中の英語の使用度が何点、文法の説明が何点、などといった評価を重ねて総合点が何点、といった具合である。つまり、授業力を点数で評価しようというわけである。

一方、授業力を観点別に点数で評価することはできないという考え方もある。子どもたちから見れば、よい先生はよい先生なのである。よい先生に恵まれたから、英語が好きになったし、今の自分がいる。こういった大学生の声を私はよく耳にする。その先生は、その場その場に応じて、きっとよい先生の役割を演じることができたのだと思う。